明石の史跡（６１）兵火

ここに、一つの棟札がある。それは、天正７年（１５７９）正月に、稲妻大明神（稲爪神社）の宝殿再建なったときのもので、棟札を納めた箱の蓋に、次のような裏書がある（『兵庫県神社誌』中．２１８頁）。

当社宝殿去戊寅六月兵火ニ而焼亡依之如古例三嶋大明神与令彫刻八尺四方之仮殿爾再奉勧請者也

天正七己卯正月　　神主藤原権太夫宗一

宝殿とは、神のやしろ（『広辞苑』）、この場合は主神をまつる本殿である。それが天正６年（１５７８）６月に、兵火にかかって焼けたというのである。兵火とは、「戦争によって起る火事」（『広辞苑』）で、稲爪神社をまきこんだ戦いとは、どのようなものをさすのだろうか。

同年３月２９日より、三木合戦がはじまる。その５日前（３月２４日）、本願寺の下間頼廉は、雑賀御坊惣中に宛てた書状のなかで、三木・明石・高砂の守りを固めるよう、指示を下した。翌２５日には、来る２７日に、岩屋（津名郡）に渡海するよう命じている（「鷺森別院文書」）。既に毛利方は、２月以前に、児玉就英が、岩屋に派遣され、西下してくるであろう織田軍にたいする、迎撃態勢が組まれている（『萩藩閥閲録』）。

毛利・雑賀の両軍が、このまま岩屋において、事態を静観していたとは考えられない。上月合戦に破れた秀吉が、書写山に撤収するのが、６月２６日。翌日より、神吉攻城戦が始まる。指揮官は、織田信忠であった。２９日、信長は津田信澄・万見重元を派遣して、兵庫～明石～高砂間の海賊に対応させている（『改訂信長公記』）。ここ明石でも、両軍のせめぎ合いが、断続的に続いたことと思われる。稲爪神社本殿の焼失も、その一齣ではなかったろうか。

日本歴史学会会員　茨木　一成

稲爪神社